

# 「タイガーマスク運動」を深掘りする

広瀬 弘忠

東京女子大教授  
(災害心理学)



ひろせ・ひろただ  
1942年生まれ。東京大卒。専門は災害時の人間行動、リスク心理学。著書に「人はなぜ逃げおくれるのか」(集英社)など。

メディアが架空の英雄への変身を促す  
阪神大震災がボランティア文化の財産

昨年のクリスマスに伊達直人を名乗る人物から児童施設にランドセルが届けられた。これは事の軽重からすれば、別段取り立てて言うほどのことではない。

だがこの自称「伊達直人」氏が、かつて一世を風靡した

漫画の主人公タイガーマスクを装って隠れた善行をしたという美談が誕生するに及んで、状況は一変する。以来さ

## 善意引き出す工夫を

さまざまな架空の英雄たちが施設や学校に善意の品々を届け、あのタイガーマスク現象が始まったのである。

マスクメディアはこれを「タイガーマスク運動」と名付け、社会的に認知され、称賛されているというメッセージを送り続けることで、人々にマスクマンやマスクウーマンへの変身を促したのだ。空気を読むことを強いられきた人々の変身願望も動機となっていたかもしれない。多くのタイガーマスクカーにとって社会的に流行している慈善行動に踏み出すための心理的抵抗は小さくなっていった。しかも匿名性と同時に、自己達成感も満

たされたのである。

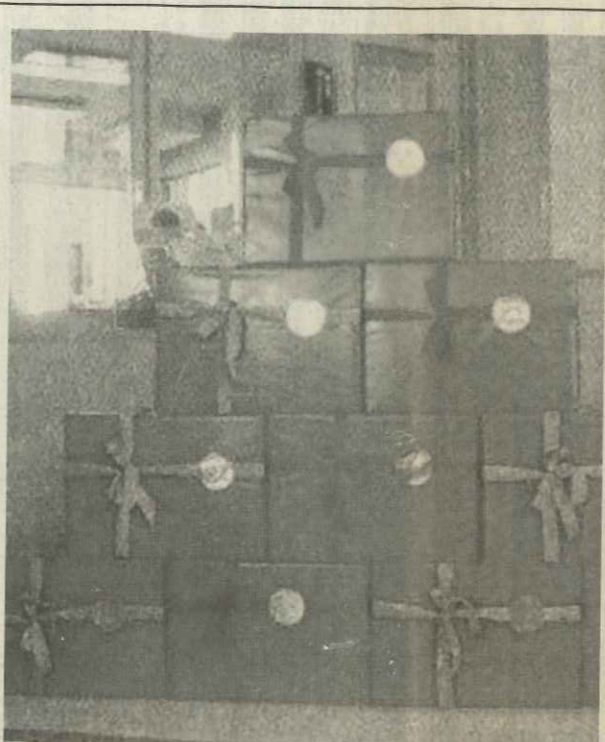
ライオンやチンパンジーのように社会生活を営む多くの種は、利己的であると同時に利他的でもある。他者を助けようとする行動は、社会的動物の頂点に立つ人間で特に著しい。それを欠けば、人間社会そのものが崩壊してしまうからだ。社会の外では、我々は生きられない。日常の生活では、利己が利他にはるかに勝っているだけのことである。だが、他人のために役立つことをしたいという欲求は、何か真に心を動かすきっかけさえあれば、ほとぼり出る行動となって湧出する。

16年前の阪神淡路大震災の

った。その後の新潟県中越地震や新潟県中越沖地震の被災地では、あの時ほどの熱気は感じられなかった。

しかし、阪神の経験が、ボランティア文化の財産として残ったことも事実だ。阪神の被災者が中越ではボランティアとして働いていたし、中越地震5年後の調査では、この地震の被災者の3分の1が、何らかの形で災害ボランティア活動に参加していた。

タイガーマスク現象は、内なる愛他精神の存在を改めて証明し、愛他風土の醸成に確かな貢献をした。読み取るべきことは、我々は困窮している他者のために役立ちたいという気持ちを十二分に持っているということである。その気持ちを引き出すのは、陳腐化した募金活動ではなく、人々の心を駆り立てる魅力的な仕組みであり、援助者の心を満足させる新しい仕掛けなのである。我々の内なる善意が詰まったヒンの固く閉ざされた栓を開けるためには、栓抜きに一層の創意工夫を凝らす必要があるということだろう。これがタイガーマスク現象の投げかけた課題である。



昨年12月25日のクリスマス、群馬県中央児童相談所の玄関前に置かれていた10個のランドセル。「タイガーマスク運動」のきっかけになった—同県提供

### 編集部から

漫画タイガーマスクの主人公「伊達直人」を名乗る人物から児童養護施設にプレゼントを届ける運動が、年末から広がっています。匿名の善意は全国に広がり、NPO法人「ファザリング・ジャパン」(東京)がタイガーマスク基金を創設しました。多くの人々の心を温かくした運動の背景や意味を、改めて考えます。この欄へのご意見は東京本社編集局の「論点」編集部へ、郵便またはメールron ten@mainichi.co.jpでお願いします。